



# 書く

## Journaling

永田円了

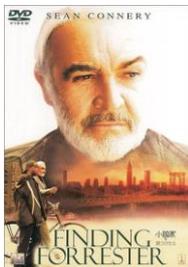
書くことは想像以上にたいへんな作業である。それが他人さまの目に触れるとなると、余計に肩に力が入り、何度も書き直すことになる。人の評価を気にする気持ちが邪魔をして、なかなか筆が進まない。さてどうしたものか。自分の思いを、どのようにうまくコトバに落として、的確に字数制限内で文章を書いたらいいのか。

### 作文とエッセイとの違い

「朝早く起きて弁当を作ってもらって、海へ行きました。天気がよかったので、日焼けをして次の朝は肩がヒリヒリしました」。小学生に作文を書いてもらうと、だいたいこのようなものになる。出来事の羅列で原稿用紙が埋まる。さて、エッセイはどうか。エッセイにはテーマ（つまり貴方は何が言いたいのか）が必要となる。出来事自身には何の意味もないからである。自分がその出来事にどう関わったのか、どう感じたのか、その出来事から何を学んだのか、このことが重要になるのである。

### テーマは深く、且つ具体的に

文章の標題を見れば、その人が何を言いたいのかが、にじみ出るものでなければならない。大学の卒論などでよく見かける「～についての一考察」「日本文化に観る女性像」などは、ただ解説されているだけで、貴方はそれで何か言いたいのか（so what?）が感じられない。



テーマがどれほど深掘りされているかが重要である。あるラジオ番組で、「映画監督になるには何が一番大切なことか」という質問に、某日本人監督は「現場のスタッフとうまくコミュニケーションをとることかな..」と答えていた。学生時代、私も同じ質問を当時来日中の英国人監督に尋ねたことがあった。その監督の答えは「人間に興味をもつことです」 You must be interested in people. だった。どちらの答えが心の根底から発せられたものか、お分かりと思う。

### 書くことで、心の解放を

まずは感じたまま、心のおもむくまま手を動かして書いてみる。自分のために、今の感情をコトバにしてみる。書き始めると不思議なことに、自分でも思いもしなかったことがらが、次から次とコトバになっていく。

書くとは、瞬間を救い出すこと（ポーヴォール）。そしてそこには、言葉で人や物事を永遠化させる喜びがある。

米国映画「プレシャス」では、問題児が集ったフリースクールの初日、レイン先生は生徒達に言う。「書きなさい」「自分自身を書きなさい」「自分のおとぎ話を書きなさい」と。そして書くことを教育の柱にするのである。書くことで、悲惨な現実のみをベースにした思考を未来志向へと導く。お伽話（夢の世界）をコトバにすることによって、明るい希望を描くことを日常化した。このストーリーのエンディングで、今まで自分を支配してきた鬼母と決別する16歳の主人公プレシャス、二人の子どもたちを抱っこして、巨体を揺すりながら歩く姿に暗さは微塵もなかった。

#### <事例>

なかにし礼「課外授業～もう一人の自分と向き合う」 NHK2003年4月  
 なかにし礼「不滅の歌謡曲～ひらめき」 NHK BS 2010年11月  
 2000年米映画『小説家を見つけたら』書く時はハートを、編集は頭を使う  
 TBS系金曜ドラマ「ドラゴン桜」2005年7月/テーマの絞り込み  
 NHK ころこの時代 2011/6/13/山折哲雄、大震災の出来事について語る  
 NHK ころこの時代 2011/5/22/印刷会社社長、Life、必然、感謝、希望 を語る  
 山田ズーニー/考えないことは不自由、 問いの100本ノック  
 エックハルト・トール/アルツハイマーになる人、ならない人  
 2009年米国映画「プレシャス」 三重苦をものともせず、我が道を行く姿  
 歌・ダイアナ・ロス/ It's My Turn 今まで人を喜ばせたくて自分を偽ってきた

円了のホームページ: [www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)

